

因果関係を表す複文の 構文モデルに関する日中対照

新田 小雨子

1. はじめに

日中両言語において、因果関係を表す複文の基本的な構造の共通点は、順行型の「P（原因）→Q（結果）」構文と、逆行型の「Q（結果）→P（原因）」構文の二種類がある点である。しかし、これらの基本的な構造から展開し、文を構成する場合は、両言語にずれが生じる場合がある。

日本語は、節と節をつないでいく上で、接続表現などの文成分の助けを借りなければならないため、構文上は形態を重視し様々な制約を受けやすい。したがって、複文の成立は、「原因→結果」または「結果→原因」といった前件と後件の関係に左右される。

一方、中国語の複文は接続表現⁽¹⁾に左右されない。また、構文上の制約を受けにくく、原因節と結果節の位置変換が自由である。そのため、因果関係を表す複文の構文モデルは基本的な構文形式だけではなく、「原因→結果→原因」のような変形型の存在も認められると想定される。

また、原因が幾つかの節によって形成される場合、日本語では因果関係を表す表現の機能的な制約を受けやすいが、中国語では、接続表現の位置に関わる制約が見られる。このように、構文上両言語には相違があり、特に接続表現の使用には違う言語事象が生じることが考えられる。本稿では、順行型構文モデル（「P→Q」）に絞って、日中両語の異同について検証した上で、各構文モデルにおける両言語の特徴およびその特徴形成の理由について探求することとする。これにより、それぞれの言語における文の構成と、接続表現の機能との関わり方を明らかにする。

2. 研究方法と研究対象

研究方法としては、日中対訳と中日対訳の文学作品より、筆者自身が因果関係を表す複文のデータを収集し作成したデータベース、および「日中対訳コーパス」を用いる。それらから研究対象に該当する用例を抽出し、傾向を観察する。両言語の特徴を客観的にとらえるため、まずそれぞれの原文に着目して、両者の特徴について検討を行う。そして分析結果に基づき、両言語の異同について記述する。

研究対象⁽²⁾とするものは、日本語においては因果関係を表す表現のうち「から・ので・ため・て」を含むものである。中国語では、日中対訳文を通して、観察された「から・ので・ため・て」と対応する傾向が強い表現を含むものを対象とする。中には、“因为/所以”などだけではなく、“关联副词”⁽³⁾の“使”などが使用されるものと、接続表現が使用されていない「無標」のものも含まれている。

3. 日中両語における順行型の構文モデル

先行研究⁽⁴⁾を参照しながら、本研究で使用するデータに基づき、両言語の因果関係を表す複文における構成の展開方法に着目すると、日中両語の因果関係を表す複文の順行型の構文モデルは【表1】のように分類できる。

【表1】日中両語の「順行型」構文モデル

構文モデル	特徴	用例
P → Q	典型的なもので、ひとつの原因節によって結果が導かれる。	男は名前の部屋だから大体はおそろしく汚ない。〔ノルム〕 〔因〕因为屋子冷,〔果〕江华不住地搓着两只大手。〔青春〕
P ₁ , P ₂ , …… → Q	複数の原因によってひとつの結果が導かれる。	これは千代からの依頼である。自動車でひつかりたという緣故があるので、何とかしてやらねばならぬ。〔あ〕 大多数孩子〔因〕因为家里穷,〔因〕缺努力,〔果〕过早地挑起了劳动的担子。〔幸福〕
(P ₁ → Q ₁) P ₂ → Q ₂	P ₁ があって、Q ₁ が生じ、Q ₁ によって、Q ₂ が生じる。P ₁ とQ ₂ は間接的に関係している。	夕方なら気温が下がって寒くなったので、吾子はずっと圍炉裏に坐っていた。〔あ〕 〔因〕〔因〕她没有听见什么声音,〔结〕以为鬼鬼已经去了,〔结〕使着她偷地把纸帘帘卷起半幅。〔家〕

〔注〕 P は原因を、Q は結果を表す。

〔注〕 中国語の用例の構成をわかりやすくするために、原因節と結果節はそれぞれ〔因〕と〔結〕によって示す。

【表1】によると、日中両言語における順行型にはそれぞれ三種類の構文モデルが見られることがわかる。しかし、「P₁、P₂、… → Q」と「{(P₁ → Q₁) = P₂} → Q₂」のような複雑構文の場合は、日中両言語の接続表現の使用へ

のこだわり方の違いによって、両者は接続表現の使用との関わり方が異なってくるのが予想される。以下、各モデルにおける両言語の構文の特徴と接続表現との関わり方について検証してみる。

4. 順行型における日中両語の構文の特徴

【表1】で示したように、順行型モデルは、①「 $P \rightarrow Q$ 」型、②「 $P_1, P_2 \dots \rightarrow Q$ 」型、③「 $\{(P_1 \rightarrow Q_1) = P_2\} \rightarrow Q_2$ 」型の3種類に分けられている。以下実例を通して①～③の構文モデルについて検討を試みる。

4.1 「 $P \rightarrow Q$ 」型における日中両語の構文特徴

4.1.1 日本語の場合

- (1) わたしは落着いた^①ので、そう言ってわらった。 『挽』
(2) 喜助の家は藪に囲まれていた^②からうす暗い。 『越』

(1)(2)はもっとも典型的な構文モデルの「 $P \rightarrow Q$ 」型である。それぞれひとつの原因より結果を導くという構文になっており、原因節と結果節の関係は直接的な論理関係である。

4.1.2 中国語の場合

- (3) ^(日)因为明白了真相, ^(中)道静的心立刻安静下来。 《青春》
真相があきらかになった^③ので、道静の心は、すぐにおちつきをとり戻した。 『青春』
(4) ^(日)她们的住房并没有兵进去, ^(中)所以东西一点也没有损失。 《家》
彼女たちの部屋には兵隊ははいらなかった^④から、品物には別条はない。 『家』

(3)(4)は“ $P \rightarrow Q$ ”型で、“因为 $P \rightarrow Q$ ”“ $P \rightarrow$ 所以 Q ”構文形式になっている。

4.2 「P₁、P₂……→Q」型における日中両語の構文特徴

4.2.1 日本語の場合

「P₁、P₂……→Q」型は、複数の原因を挙げて、ひとつの結果を導くものであり、日本語の中では、原因・理由を表す「し」節または「て」節と「から／ので」節との併用によって、表現する機会が多い。原因節の順序は接続表現の機能的な制約を受け、「非明示 ⇒ 明示」ないし「非明示 ⇒ 非明示」といった順序で並べていく。ここで言う「非明示」「明示」とは、原因・理由を明示的に示す接続表現を用いた節を「明示」と、明示的に述べる機能を持たない接続表現を使用した節を「非明示」と考えるという意味である。主たる表現形式としては、「P₁し、P₂ので／から→Q」、「P₁て、P₂て→Q」などがある。

- (5) 矢須子さんは疲れているようだし、昼飯を知らせるベルが鳴ったので、それを汐に帰ることにする。 『黒』
- (6) 大学教授も銀行家に用事があるらしかったし、銀行家の方も大学教授に頼みたい事があつたらしかったので、二人を自分が仲に立って引き合せてやったのである。 『あ』
- (7) 陽にあぶられ、雨に濡されて、思う存分に変形した。 『野』
- (8) あまりうれしくて、ありがたくて、涙ぐんでしまった。 『斜』

(5)～(8)は、何れも複数の原因節よりひとつの結果を導くという構文になっている。(5)(6)は「P₁し、P₂ので→Q」構文であり、原因節は因果関係を明示させない節から明示させる節へといった順序になっている。原因・理由を表す「し」節は「から・ので」節より緩やかな因果関係を表しており、ほかにも理由があるという意味合いも含まれているので、複数の原因によって、ひとつの結果を導く構文には多く用いられる。「P₁し、P₂ので→Q」文の原因節は何れも結果節と直接的な論理関係を有している。つまり、「P₁し→Q」構文と「P₂ので→Q」構文の何れも成立するということである。たとえば、例(6)の場合は、原因節の①と②を分散させれば、それぞれ結果節と組み合わせることができる。

(6') 大学教授も銀行家に用事があるらしかった \square し、二人を自分が仲に立って引き合せてやったのである。

(6'') 銀行家の方も大学の教授に頼みたい事があつたらしかった \square ので、二人を自分が仲に立って引き合せてやったのである。

(6') (6'') の二つの文はいずれも前後節の間に論理関係が読み取れる。また、(6') の「し」節は「ので」節と同時に使用されない場合に、「ので」に置き換えてもいいと考えられる。(6) の場合は、「し」節を「から」節と置き換えられるが、「ので」と置換すると、すわりが悪くなる。日本語ではいくつか原因節が羅列され結果節を導き出す際に、因果関係を明示化させる機能を持つ表現の「から、ので」などは「 P_1 から、 P_2 ので」や「 P_1 ので、 P_2 から」といった構文は許されるが、「 P_1 から、 P_2 から」、「 P_1 ので、 P_2 ので」のように、同じ表現が同一文の中に使用されることはなじまないのである。

(7) (8) の構文は、「非明示 \Rightarrow 非明示」の順序で並べたものであり、原因節はそれぞれ因果関係を明示的に示す機能を持たないもの同士によって構成されている。そして前述した「非明示 \Rightarrow 明示」型と同様に、各原因節は結果節と直接的に結びついており、結果節との論理関係は一目瞭然である。たとえば例(7)の場合は、原因節①と②を分散して結果節と組み合わせてみると、以下のような文になる。

(7') 陽にあぶられ、思う存分に変形した。

(7'') 雨に浸されて、思う存分に変形した。

何れも結果を引き起こす直接的な原因として認められるので、結果節と直接的に結びついている関係が明らかになっている。

このように、複数の原因節を羅列して、ひとつの結果節を導く「 P_1 、 P_2 …… $\rightarrow Q$ 」構文モデルは、原因節の何れにおいても、結果節と直接的な論理関係が発生し、結果節と同一表現階層⁽⁵⁾にあると言えよう。

4.2.2 中国語の場合

中国語では、日本語と同じ構文条件で原因節に原因を表す接続表現が使用される場合、“因为”がもっとも多い。しかし中国語は、すべての原因節が接続表現によって表されるわけではなく、接続表現の使用は任意であるため、接続表現を使用する場合と使用しない場合の何れもある。

- (9) (因) 因为他不低头, (因) 他不认罪, (就) 那伙人就把他关进了一个厕所。 《轮椅》
彼は屈服もせず、罪も認めなかったから、あいつらは彼をトイレに閉じ込めた。
『車』
- (10) (因) 因为他骂得有理, 骂得痛快, (所以) 天天有人坐成一圈听他叫骂。 《钟》
言い分が通っていて、しかもものしり方が痛快なものだから、毎日多くの人が輪になって腰かけ、それを聞いて喜んでいた。
『鐘』
- (11) (因) 邓久宽耳朵有点聋, 又加上他大声吆喝牲口, (所以) 没有听到高大泉的喊声。 《金光》
鄧久寛は耳が少し遠いし、大声でロバを追っているので高大泉の叫びもきこえなかった。
『輝け』

(9)～(11)は複数原因の“P₁, P₂……→Q”構文モデルであり、原因を表す接続表現を使用する“因为P₁, 因为P₂……→Q”、“因为P₁, P₂……→Q”構文と、原因を表す接続表現を使用しない“P₁, P₂……→Q”構文がある。

例(9)の原因節①と②にはそれぞれ典型的な原因を表す接続表現の“因为”が使用されている。二つの節を羅列して結果節と直接的に結びついている。

(9') 因为他不低头, 那伙人就把他关进了一个厕所。

(9'') 因为他不认罪, 那伙人就把他关进了一个厕所。

上記の通り、(9')と(9'')の何れも成立する。また、並列している二つの原因節の順序を変えても意味が変わらず、各節にある原因を表す接続表現の“因为”の機能領域⁽⁶⁾は所属節に限られている。さらに各節に原因を表す接

続表現が使用される場合、同じものでなければならない。中国語では、原因を表す接続表現の“由于”も多く使用されるが、原因節を並列に並べていく場合、日本語のように異なる接続表現を使用することは認められない。たとえば、(9)を次のように変えると、中国語として成り立たなくなる。

(9') * 由于他不低头, 因为他不认罪, 那伙人就把他关进了一个厕所。

中国語の原因を表す接続表現は論理的であり、二つの原因節に異なる接続表現が使用されると、独立性の強いものになってしまい、原因節の間の並列的な意味合いが消える。原因を表す接続表現が同じものであれば、“因为 P₁, 因为 P₂……”、“由于 P₁, 由于 P₂……”という表現形式となり、中国語のレトリックのひとつの“排比”⁽⁷⁾ という機能によって、節と節の並列性が生み出される。しかし、先頭の原因節のみに接続表現が置かれる場合、原因節①と②の間の並列性に影響を及ぼさない。例(10)は原因節①のみに接続表現が置かれ、原因節①と②の間に、接続表現がなくても、内容により、それぞれが原因節になっていると判断できる。しかも、二つの節の間に並列的に並べていく意味合いを帯びている。ただし、接続表現が置かれる原因節①とそれと並列している原因節②の順序を変えようとする場合、原因節同士の間での順序の入れ替えしかできず、原因節①に位置する原因を表す接続表現は移動できない。

(10') * 骂得痛快, 因为他骂得有理, 所以天天有人坐成一圈听他叫骂。

(10") 因为他骂得痛快, 骂得有理, 所以天天有人坐成一圈听他叫骂。

(10') の [骂得痛快] は後ろの [所以天天有人坐成一圈听他叫骂] とのつながりが第二節の先頭に立つ原因を表す接続表現に遮断され、無関係のもの同士であるように見える。(10") は原因を表す接続表現を移動せず、単なる原因節同士の入れ替えなので、原因節のいずれも、結果節と論理的な関係が発生し、意味的にも(10)と同様である。よって、複数の原因節を羅列して、原因を表す接続表現が文頭にしかない場合は、原因を表す接続表現の機能領

域は最後の原因節まで関係しているということがわかる。つまり〔(因为他骂得有理), 骂得痛快〕だと考えるのではなく、〔(因他(骂得有理, 骂得痛快))〕だと考えるべきである。

(11)は原因を表す接続表現が使用されていない“P₁, P₂……→Q”構文である。接続表現がなくても、各原因節と結果節との間の論理関係が読み取れる。

(11') 邓久宽耳朵有点聋, 所以没有听到高大泉的喊声。

(11'') 他大声吆喝牲口, 所以没有听到高大泉的喊声。

(11')の〔耳朵有点聋(耳が遠い)〕という身体的な支障によって、〔没有听到高大泉的喊声〕という結果が生じたのに対して、(11'')は〔大声吆喝牲口〕から、他のことにまったく気付いていないという状態も想像できる。

以上の分析を通して、中国語の“P₁, P₂……→Q”型の構文の特徴については次のようなことがわかる。

原因を表す接続表現が使用される場合、二つの表現形式がある。つまり、あらゆる原因節に接続表現が置かれる表現形式と、同一文内で接続表現が置かれる原因節もあれば、置かれない原因節もあるという表現形式である。前者の場合は、各節の原因を表す接続表現の働きは所属節に限られている。後者の場合は、接続表現が置かれる位置は決して任意ではなく、接続表現は原因節①に置かなければならない。また、第二節に接続表現がないため、原因節①に置かれる原因を表す接続表現の機能領域は第二節まで関係していることも考えられる。原因節の並べ方は、接続表現の機能的な制約を受けず、接続表現の位置またはその統一性の制約を受けるということがわかる。

接続表現の位置について言えば、複数の原因節を並べ、それらにひとつの接続表現しか置かれない場合、接続表現の位置は文頭でなければならない。統一性について言えば、各原因節に原因を表す接続表現が置かれる場合、同じ接続表現でなければならない。節と節の並べ方は“明示 ⇒ 明示”である。また、反対に各原因節に接続表現を置かず、単なる原因節同士で並んでいく

という場合もある。この場合は、節と節の並べ方は“非明示 ⇒ 非明示”⁽⁸⁾である。複数の原因節があり、接続表現が先頭しか置かれられないものにも統一性が見られる。その場合、節と節の並べ方は“G=关联词语 (非明示 ⇒ 非明示)”と考えられ、また“明示 ⇒ 明示”とも考えられる。というのは、“G=关联词语”は同一接続表現であるので、各原因節への働きかけは同様だからである。たとえば(10)の場合、原因節の[因为他(骂得有理, 骂得痛快)]は“因为(P₁, P₂……)”という“G(非明示⇒非明示)”⁽⁹⁾構文であるが、[因为他骂得有理, 因为他骂得痛快]のように、“因为P₁, 因为P₂……”という“明示 ⇒ 明示”構文に変えてもよい。

4.3 重層型 {(P1 → Q1) = P2} → Q2 における日中両語の構文特徴

4.3.1 日本語の場合

この種類の複文の構造は鎖状の因果関係になっており、節と節の間に因果関係が存在するが、単純な因果関係より複雑である。

- (12) 岩竹さんの顔はますます腫脹が増し^て、水瓜のように丸々となった^{ので}、臉が殆ど閉じたきりと同じになっていた。 『黒』
- (13) 克平は会社の客と食事をするといっていた^{ので}、どうせ帰宅は遅くなるだろうと思っ^て、八千代は先きに風呂にはいった。 『あ』
- (14) 読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れ^て、意味が繋がらない^{から}、又頭から読み直してみた。 『坊』
- (15) 鎖がついている^{ので}、八千代の足まではとどか^ず、何回もむだな努力を繰り返している。 『あ』
- (16) 手が出せない^{ので}、門をしめる事が出来ない^{から}開け放しのまま行ってしまった。 『吾』
- (17) 赤シャツが席に復するのを待ちかね^て、山嵐がぬっと立ち上がった^{から}、おれは嬉しかった^{ので}、思わず手をぱちぱちと拍った。 『坊』

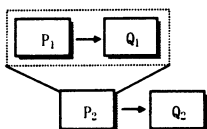
重層型になるものは、例(12)～(15)のように、「から、ので」節以外に、「て」

節、「ず」節などもいっしょに使用することで重層複文を形成するのが一般的な表現形式である。また例(16)(17)のように「から」節と「ので」節からなる重層複文も見られる。日本語では、因果関係を明示化させる接続成分と因果関係を明示化させない接続成分の何れもあるが、因果関係を明示化させないものから明示化させるものへと発展するのが一般的である。機能・論理的には、因果関係を明示しないものから明示するものへと発展し、前者が後者に包含されるといったプロセスが基本的な表現用法であるが、実際には基本的な表現用法に背く場合もある。上例の中には、「～て」節から「から／ので」節へと展開するものもあれば、「から／ので」節が先行し「～て／～ず」節へと続くものもある。

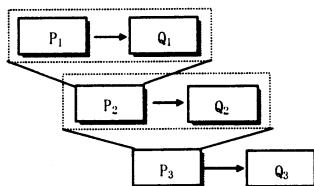
(12)～(16)の構造は $\{(P_1 \rightarrow Q_1) = P_2\} \rightarrow Q_2$ 式の二重構造のものであり、「 P_1 」と「 Q_2 」は同一階層に存在していないと考えられる。なぜならば、原因節「 P_1 」は結果節の「 Q_2 」とは直接的に関係していないからである。たとえば、例(16)は、「 P_1 」の「手が出せない」という原因によって、「 Q_1 」「門をしめる事が出来ない」という結果が生じたが、「 Q_2 」の「開け放しのまま行ってしまった」という結果とは直接的な論理関係が発生しない。しかし、発生しないとはいえ、「 P_1 」と「 Q_2 」とは無関係だと言えない。というのは、「 P_1 」は最終的な結果の元原因であり、「 P_1 」があつて、「 Q_1 」が生じ、「 Q_1 」によって、「 Q_2 」が生じたからである。

論理的に考えると、「 P_1 」と「 Q_2 」は間接的に関係していると認めるべきである。「 P_1 」と「 Q_2 」は同じ階層に属していないとはいえ、「 P_1 」の存在は、間接的に「 Q_2 」に影響を及ぼすため、「 Q_2 」という結果の発生は「 P_1 」と「 Q_1 」によるものだと言える。(17)は $[\{(P_1 \rightarrow Q_1) = P_2\} \rightarrow Q_2] = P_3 \rightarrow Q_3$ 式の三重構造のモデルである。この種の文は構造的には複雑であるが、階層間の論理関係は二重構造のモデルと同様に考えてもよい。このモデルの構造は、論理的に考えると、「 P_1 」は「 Q_1 」の発生原因であり、元原因の「 P_1 」とその結果の「 Q_1 」は「 Q_2 」の発生原因である(「 Q_1 」は「 Q_2 」の直接原因)。さらに、元原因の「 P_1 、 Q_1 」とその結果の「 Q_2 」は「 Q_3 」の発生原因となる(「 Q_2 」は「 Q_3 」の直接原因)。これらの構文モデルは以下のように図示

できる。



【図1】2重構造の構文モデル



【図2】3重構造の構文モデル

4.3.2 中国語の場合

中国語では、 $\{(P_1 \rightarrow Q_1) = P_2\} \rightarrow Q_2$ 型は少なくない。この種の文は、原因節が後ろの結果節の行動の理由になっているものが多く、ほとんどの結果節で接続表現が省略されず、そのまま用いられている。

- (18) (因) 她因现在独身一人, (不) 不愿为生火做饭浪费光阴精力), (所以) 时常就在单位食堂就餐, 在医务室中就宿, …… 『钟』
いまは独身なので、ご飯の支度に時間をかける気も起こらず、たいてい勤め先の食堂ですませ、医務室に泊まっているという。 『鐘』
- (19) (因) 夏天天热的, (不) 运不回来), (只好) 只好埋在了村后的山坡上。 『插队』
夏に死んだから遺体を移送できなくて、村の裏の山腹に埋めたわ。 『遙か』
- (20) 在这个公馆里, 大部分的人 (因) 因为一夜没有休息, (不) 支持不住), (便) 便早早地睡了。 『家』
この邸もまた静寂に返ってゆく 大部分の人が徹夜したので、堪らなくなって早々に床にはいる。 『家』
- (21) (因) 因为煤块砸伤了脚, (不) 好几个月不能上班), (结果) 结果叫路局裁下来了。《青春》
石炭の塊りで足にけがを、数カ月間出勤できなかったために、鉄道局から首をきられてしまった。 『青春』
- (22) 她 (因) 因为找不到工作, (不) 无处泄愤), (就) 就常常找我出气。《青春》
仕事の見つけられなくて、むしろくしゃしてるもんだから、いつもぼくにあたるのさ。 『青春』

上掲した用例の構造は全て $\{(P_1 \rightarrow Q_1) = P_2\} \rightarrow Q_2$ 型になっている。この型には、原因を表す接続表現が使用されるものと使用されていないものの2種類がある。使用される場合は先頭に立つ「 P_1 」原因節のみに置かれているが、結果と原因の二つの役目を担っている節には原因ないし結果を表す接続表現の何れも置かれていない。表現形式としては、“{(因为 $P_1 \rightarrow Q_1$) = P_2 } → 使 Q_2 ” または “{($P_1 \rightarrow Q_1$) = P_2 } → 只好 Q_2 ” などがある。文頭に立つ原因を表す接続表現は、“ $P_1, P_2 \dots \dots \rightarrow Q$ ” の機能領域とは異なって、先頭の原因節までしか関わっていない。たとえば、(21)の場合は、[因为煤块砸伤了脚]という出来事によって、[好几个月不能上班]という結果が導き出され、節と節の間に論理関係が成立する。したがって、原因節に立つ接続表現は[煤块砸伤了脚]までにしか影響を及ぼさない。(18)～(22)の文の構造も前述した日本語と同様に解析できる。ここでもう一度(21)を分析してみる。

(21') 因为煤块砸伤了脚，好几个月不能上班。

(21'') 好几个月不能上班，结果叫路局裁下来了。

(21''') * 因为煤块砸伤了脚，结果叫路局裁下来了。

(21') (21'') は論理関係が成立するが、(21''') は論理関係が成立しない。しかし、ひとつの文になる場合、[叫路局裁下来了]という結果が生じた原因は[好几个月不能上班]であり、[好几个月不能上班]という結果が生じた原因は[因为煤块砸伤了脚]であるといったように遡ると、[因为煤块砸伤了脚]という出来事が [叫路局裁下来了] という最終結果の元原因になっているのがわかる。このように、[因为煤块砸伤了脚]と[叫路局裁下来了]との間に間接的な因果関係を持つことも認めなければならない。つまり、[叫路局裁下来了]という結果の発生は、「間接原因+直接原因」によるものである。

5. まとめ

以上の分析結果を簡単に整理すると、次のようになる。

順行型では、両言語の構文上の対応性が極めて高い。つまり、日本語にある

構文モデルは、中国語にもそれと対応できる構文モデルが見られるということである。ただし、構文モデルが構成される場合、異なる制約を受けることが観察される。たとえば、日本語は複数の節を羅列して原因節を構成する場合に特徴的なのは、原因を表す接続表現の機能を考慮し、原因節を明示的に示す機能を持たないものから明示的に示す機能を持つものへと構成していく点である。これに対して、中国語で原因を表す接続表現が使用される場合、接続表現の位置、または統一性を考慮しながら、原因節が構成されていく。

構造上は両言語の類似点が多いが、どのように文を構成していくかという点では、両言語の相違が見られる。以下、両言語の順行型の構文モデルに関する分析結果に基づき、原因を表す接続表現との関わり方を中心に、いくつかの項目に注目した対照分析結果を【表2】にまとめる。

【表2】順行型モデルにおける両言語の分析結果の比較

順行型モデル	言語	節の構成		原因を表す接続表現			主な表現形式	備考
		原因節の数	機能 位置	数	位置	使用制約		
P→Q	日	ひとつ	単節	ひとつ	原因節のみ	所属のみ	Pから-Qなど	典型的な構文モデル
	中	ひとつ	単節	ひとつ	原因節のみ	所属のみ	因为P→Qなど	典型的な構文モデル
P、P1……Q	日	複数	単節	複数	各原因節が 明・暗(可)	所属のみ	P1、P1……Qなど	原因節がP1から、結果節と重複的な論理関係を持つ。原因節は「原因節→明か、なし、暗明か→明か、なし」の順で構成される。
	中	複数	単節	複数	各原因節が 同一機能 表現使用	所属のみ	因为P、因为P1……Qなど	原因節がP1から、結果節と重複的な論理関係を持つ。各節に同じ機能領域が使用される場合、同じP1がなければならぬ。
	日	複数	複節	ひとつ	原因節1個 文節	原因節全体	P、P1……Qなど	原因節がP1から、結果節と重複的な論理関係を持つ。文節にある原因節を若干省略する場合はP1で報告し、P1……Qのように理解されない。
	中	複数	複節	ひとつ	原因節1個 使用可	原因節全体	P、P1……Qなど	各原因節と結果節との関係は内容によって異なる。
P1→Q、P1→Q1	日	複数	複節	複数	各原因節が 明・暗(可)	所属のみ	P1、P1→Q1、P1……Q1など	P1、Q1とは同一機能に存在しない。原因節の構成は「原因節→明か、なし、暗明か→明か、なし」の順で構成される。
	中	複数	複節	ひとつ	原因節1個 使用可	原因節のみ	因为P1→Q1、P1……Q1など	文節にP1とQ1を若干省略する場合はP1、P1……Q1も機能しない。先述の構成要素でP1、P1……Q1も機能しない。

注：(●) P1のみ、P2のみ、Qは許されるが、P1のみ、P2のみ、Qの1つに同じ表現が同一文の中に使用されることはない。

6. おわりに

本稿では、日中両語の順行型の構文モデルにおける構文上の特徴および接続表現の機能との関わり方について検討し、記述した。因果関係を表す複文の構文上において、両言語の展開方法には順行型から観察された傾向より、更に複雑な言語事象も存在するということが確信できる。今後、逆行型と中国語しか見られない構文の変形型についても検討する所存である。

注

- (1) 日本語では接続機能を有するものを「接続表現」と呼び、中国語では“关联词语”と呼ぶが、本稿では、便宜を図るため、用語を統一し、日本語の「接続表現」と中国語の“关联词语”を共に「接続表現」と呼ぶことにする。
- (2) 複雑な構文、つまり原因節が複数のものである場合、「から・ので・ため・て」以外の接続表現を使用する節も現れるが、「から・ので・ため・て」のいずれかが含まれる場合は、研究対象とする。
- (3) 接続機能を持つ副詞である。
- (4) 構文モデルに関する分類は、データ上の傾向と先行研究に基づき行った。先行研究は主に刘楚群(2002)《“因为”和“由于”差异初探》を参照した。刘(2002)では、原因節の位置によって、因果関係を表す複文の構造を4種類に分けている。
 - ① “由因推果”(X→Y)
 - ② “由果溯因”(Y←X)
 - ③ “多因推果”(X1, X2, X3……→Y)
 - ④ “一果多因”(Y←X1, X2, X3……)
- (5) 「原因」が「結果」と直接結びついている場合を「同一表現階層」と理解する。
- (6) 接続表現の働きはどこまで関わっているかということを表している。つまり、接続表現の働きの影響を受ける範囲を意味する。
- (7) 修辞法の一つである。構造が似通い、意味が密接に関連し、語気がそろった節または文を並列する修辞法。
- (8) ここで言う「明示」と「非明示」は、日本語とは少し違いがある。中国語の原因・理由を表す接続表現には明示的なもののみ存在しているため、「明示」は接続表現が使用される場合を指し、「非明示」は接続表現が使用されていない場合を指す。
- (9) “G”には特に意味がなく、単なる節と節または文と文の意味関係を表すものであり、文中の独立成分であるため、“G(非明示⇒非明示)”の“G”は文頭にある場合、前の原因節への働きと、後ろの原因節への働きは同様である。

用例出典

『挽歌』原田康子 新潮社 1961

『吾輩は猫である』夏目漱石 新潮社 2002(1905)

北京日本学研究中心「日中対訳コーパス」2003

【日本語が原文であるもの】

【中国語が原文であるもの】

日本語が原文であるもの			中国語が原文であるもの					
略称	書名	著者	中国語原文			日本語訳文		
『あ』	『あした来る人』	井上 靖	略称	書名	著者	略称	書名	訳者
『坊』	『坊ちゃん』	夏目漱石	《青春》	《青春之歌》	杨 沫	『青春』	『青春之歌』	島田・三好
『越』	『越前竹入形』	水上 勉	《金光》	《金光大道》	浩 然	『輝け』	『輝ける道』	神崎勇夫
『黒』	『黒い雨』	井伏鱒二	《轮椅》	《轮椅上的梦》	不 明	『車』	『車椅子の上の夢』	不明
『野』	『野火』	大岡昇平	《钟》	《钟鼓楼》	刘心武	『鐘』	『鐘鼓楼』	蘇琦
『ノル』	『ノルウェイの森』	村上春樹	《捕隊》	《捕隊的故事》	史铁生	『遙か』	『遙かなる大地』	山口 守
『斜』	『斜陽』	太宰 治	《家》	《家》	巴 金	『家』	『家』	飯塚 朗

参考文献

遠藤裕子(1982)「接続助詞「て」の用法と意味」『音声・言語研究』2 東京外国語大学音声学研究室

田窪行則(1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』5 明治書院

張 素芳(1994)「接続助詞「し」の用法と意味」『文芸研究』(通号 135)

寺村秀夫(1981)『日本語の文法』下 国立国語研究所

新田小雨子(2004)「因果関係を表す接続表現における日中対照研究」『ことば』25

蓮沼昭子(2001)『日本語文法セルフマスターシリーズ7条件表現』くろしお出版

望月通子(1990)「条件づけをめぐる一「理由」の「シテ」と「カラ」一」『日本学報9』

大阪大学文学部日文学研究室

于 日平(2000)《現代日語中原因、理由、目的句相关性的研究》世界知識出版社

王 起瀾(1989)《汉语关联词词典》福建人民出版社

邢 福义(2000)《汉语复句研究》商務印書館

刘 楚群(2002)《“因为”和“由于”差异初探》《安徽教育学院学报》第20卷第1期

莫 超(1997)《关联词语的定位与主语的关系》《兰州大学学报》社会科学版 25

(にった さよこ)